

[2] 日本の精神性と舞台に昇ったヨーロッパの月 J.ノイマイヤー振付『月に寄せる七つの俳句』

1989年8月4日 東京新聞 夕刊

いま最も注目されている振付家の一人であるジョン・ノイマイヤーが、東京バレエ団公園で、新作『月に寄せる七つの俳句』を発表するというので、いったいどんな振り付けか、見にいった。日本的なものの舞踊表現ということについて、以前から考えていたからである。

●『山姥』での表現

たとえば常盤津『山姥』の「山めぐり」。

『山姥』というのは、もともと歌舞伎の一段物の舞踊劇で、遊女八重桐が鬼女となって足柄山に住み、坂田蔵人とのあいだに生まれた子、怪童丸（後の坂田金時）を育てるが、やがて子は成長し、源頼光に仕官するため山を下ることになる。その親子の別れに際して、母がはなむけに山の四季を舞うのが「山めぐり」で、最後はそのとおり、「山また山に山めぐりして 行方も知れずなりにけり」というものである。当世風に言うならば、子どもの独立で、空の巣症候群におびえるオバタリアンの心もよう、でもあろうか。

「桃が笑えば桜がひざる 柳は風の鷹揚に……」

踊りの振りは、「桃が笑えば」というところで、小さく両手を打ち合わせて、目の前に咲いているつもりの桃の花に目を止めると、笑うところでかすかに首を振り、顔をちよつと背けて口元に手を当てる。それから袂たもとのかげで桃の花を指さして優しげにからかうのである。名手がさり気なく流麗に動けば、まことに上品で奥が深い。

●時に花、時に人

踊り手は、時に花になり、時にこれを見る人になる。

山姥として舞台に立ってはいるのだが、しかしこの踊りは山姥その人を表現しようとしているわけではないのだ。さりとて、ただ美しいだけの自然でもない。桃や桜があり、これを子別れの母が見る。来し方と、そしてたぶん自分の行く末を思って、しかしそんなこと

[2] 日本の精神性と舞台に昇ったヨーロッパの月 J.ノイマイヤー振付『月に寄せる七つの俳句』

1989年8月4日 東京新聞 夕刊

は表に出さずに、ひたすら花を舞う。人と自然とが、分ちがたく混然と一体をなす境地がそこにはある。つづく「桜がひざる」では、そこにあるはずの桜の木を見上げて、なんて見事な、とても言いた気に、ほれぼれと三歩ほど近寄ると、扇をひらき、今度は後ろを向いて扇にかくれて背をそらせる、つまり自分が「ひざる」のである。「ひざる」とは、岩波古語辞典によると「①そりかえる。②腹を立ててすねる」とある。「柳は風の」は、扇を上から下へヒラヒラとさせて風になびく柳を表し、「鷹揚に」で、左を懐手して鷹揚なようすをして、右手の扇の先で向こうの柳を差す。これが日本舞踊である。そして舞踊はいつもその本質において精神の表現にほかならないから、そこに伝統的日本の精神性を見ることも可能なのである。

● さてバレエでは

しかし、バレエでこれを踊るとなると……、果たしてどうなるのだろうか。

というわけで見た『月の俳句』だが、これが実に素晴らしかった。

まずプログラムに、配役として「月」、「月を見る人」、「水面に映る夜空」とある。文法用語で言えば、主語、動詞、目的語、副詞句と完全にとのつている。これでこそ明瞭に意味を成すことが可能なわけだ。プラトーンが『饗宴』のなかで、愛する者Ⅱ「愛者」と愛される人Ⅱ「愛人」とがあつて、「愛」が成り立つとしたギリシャ以来の発想は今も脈々と受け継がれていることが分かるというものである。「愛」は、あなたと私の間のけじめがなくなつて、一つに溶け合ったあげくの混沌を示す言葉では決してない。少なくともヨーロッパでは、ない。

幕が開くと、背景に映し出された大きな満月。下手の前面にゴンドラのような白い舟があつて、中に男が一人、月を見上げてゐる。そして舞台奥を、下手から上手に、「月」がゆっくりと歩いて行く。それは、ほと

[2] 日本の精神性と舞台に昇ったヨーロッパの月 J.ノイマイヤー振付『月に寄せる七つの俳句』

1989年8月4日 東京新聞 夕刊

んどあたりの空気の質まで変わってしまったかと思われるような、まぎれもないヨーロッパの月であった。七つの俳句は季節の移り変わりにしたがって朗読され、音楽と音楽のつながりになる。最初の「赤い月 是誰がのじゃ 子供たち（一茶）」は、「月を見る人」のグループが赤いボールをやりとりするボール遊びのようなもの、軽やかで無邪気な躍動感があふれる。次の「人に似て 月夜のががし あはれなり（子規）」は、ムソルグスキーの『展覧会の絵』のなかの「カタコンブ」を連想させて、地下の亡霊たちのごとき群舞の人形振り。「かがしのあはれ」にはほど遠いが、しかしこれもヨーロッパ精神の景物にはちがいない。

やがて踊りそのものが、ますます強くしなやかに生きはじめ。動きは八割がた伝統的なロマンティック・バレエの基本にしたがうゆるやかなもの。踵かかとをおろしたアラベスクが印象的で、優雅で濃密。そこに展開するのは、ヨーロッパという精神風土にすっかり根づいているノイマイヤーという才能あふれる振付家の、内面にある季節と月のイメージそのものだ。彼もまた彼なりに、「心のありよう」を見事に舞踊化したといふべきであろう。

●異質かつ正統な

俳句は途中から踊りの具体的な内容とはほとんどかわりをもたなくなる。だから、ノイマイヤーが扱よっている英訳に、いささか誤訳があったとしても、それは舞踊としてのこの作品をいささかも傷つけはしないのである。たとえば「小言いふ 相手もあらば 今日今日の月（一茶）」が、「私の口やかましい女房が、ここにいてくれさえしたらなあ！」であっても、それはそれがかまわないのだ。西欧的な文化の中では、むしろその方が絵になるというものである。

日本の「俳句」とこれほど異質で、しかも同時にこれほど正統的な作品を、ヨーロッパの人たちはどう評価するか、それを知りたいと思った。